

Title	J. M. Synge: Deirdre of the Sorrows : 「美」と「現実」の問題
Author(s)	栞田, 良一
Citation	Osaka Literary Review. 4 P.75-P.83
Issue Date	1965-09-30
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25800">https://doi.org/10.18910/25800</a>
DOI	10.18910/25800
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## J. M. Synge : *Deirdre of the Sorrows*

### —— 「美」と「現実」の問題 ——

枡 田 良 一

J. M. Synge の覚え書の中に——

It is absurd to say a flower is not beautiful nor admire its beauty because it is deadly, but it is absurd also to deny its deadliness. (Introduction to *Plays by John M. Synge*, George Allen & Unwin Ltd, Reprinted, 1958, p. v. )

と、このように述べられている箇所があるが、これは彼の美意識を端的に示している。即ち、此処で意味されていることは美の感知と現実の認識の問題の提起である。この「美と現実」の問題に就いては彼の紀行文 *The Aran Islands* の中でも屢々言及されており、私達はこの散文集によっても美に対する彼の感受性の輪郭を知ることができる。

彼の四篇の喜劇 *The Shadow of the Glen*, *The Tinkers Wedding*, *The Well of the Saints*, *The Playboy of the Western World*. 或は、悲劇 *Riders to the Sea* においても、夫々互いに異なる特徴が認められるが、戯曲の題材に対する作者の態度には、「美と現実」の認識への終始一貫した姿勢がうかがえる。

「赤枝の騎士の説話」(Red Branch Cycle) —— 或は一名「アルスター説話」(Ultonian Cycle) とも呼ばれるが —— この説話から題材を得た Synge の未定稿の三幕物の悲劇 *Deirdre of the Sorrows* における彼の美意識・現実認識も本質的には前五篇の戯曲の場合と軌を一にしている。

そこで、この戯曲における、彼の、現実認識の上に立つ美意識とは如何なるものとして理解することができるか——というこの点に問題を集約して戯曲 *Deirdre of the Sorrows* 解明への一方向を与えたいと思う。

この戯曲の行動線の方向を決定づけているのは、対蹠的な位置にある Deirdre と Conchubor との間の対立である。

‘story teller’である Fedlimid の娘 Deirdre は、‘druid’の Cathbad によって、Usna 家の三兄弟 Naisi, Ainnle, Ardan, 及び、Ulster の滅亡をもたらすと予言されており、そのため Ulster の ‘High King’である Conchubor の命によって乳母 Lavarcham の手に託され、Slieve Fuadh の人里離れた山中で養育されており、そしてこの老いたる王 Conchubor は成長した Deirdre の美貌に惹かれて彼女を妃として迎えることに決めている。Synge の戯曲は此处から始まるのであるが——、Conchubor の意図は Deirdre のそれと最初から相容れないものとして示されている。

第一幕において Conchubor が Lavarcham に、“Isn’t it a poor thing you’re doing so little to school her to meet what is to come?” (*Ibid.* p.279.) と、Deirdre が王妃となるに相応しい躰を欠いているのをなじる時、Lavarcham は “. . . she’s little call to mind an old woman when she has the birds to school her, and the pools in the rivers where she goes bathing in the sun.” (p.279.) と弁解している。この台詞によって、因習或は世間的現実の人である Conchubor にとっての何の疑念もなき現実——即ち——当然人生の最高の栄誉と見做されるべき王或は王妃の位置も、自然の子たる Deirdre には何の価値もないことが分る。このように両者は異質なものとして元来融合できないように条件づけられており、Lavarcham はそのことを感じて、“. . . it wasn’t for your like she was born at all.” (p.280.) と進言するが、Conchubor は、物質的安定の上にある自らの権力に何の疑いも抱いていないから、その意味で、異質なのも自らと同質のものに変化するか、又は、変化しないまでも、同調するのが彼にとって理の当然であってみれば、Lavarcham の忠告に対しても、次のように “It’s little I heed for what she was born; she’ll be my comrade, surely.” (p.280.) と、自らの意図を強調するのみで、Deirdre の世界を理解する術も知らない。他方、彼女の方は Conchubor に向って、“A girl born the way I’m born is more likely to wish for a mate who’d be her likedness. . . . A man with his hair like the raven, maybe, and his skin like the snow and his lips like blood spilt on it.” (p.282.) と、このように、自分と Conchubor が異質な

存在であることを認識している。そして此処には Conchubor の「老」に対する彼女の「若さ」の主張が見られる。「若さ」の主張は、素朴な自然を愛し束縛を嫌う心と通じており、彼女にとって、Emain Macha の王宮での生活は、これらの「若さ」「自然」「自由」を犠牲とするに足りないものであり、彼女は、“I will not be your queen in Emain when it's my pleasure to be having my freedom on the edges of the hills.” (p.285.) と、Conchubor との生活を否定している。勿論、“What we all need is a place is safe and splendid, . . .” (p.284.) と、このように、物質的な安定と華麗さを生活充実の条件としている彼女にとって Deirdre の心情が理解できる筈がない。物質的な安定と富によって彼女の心を動かすことができないとなると、Conchubor の行使するのは王の権力——即ち、暴力としてのそれ——である。彼女は、“(terrified with the reality that is before her). Are there none can go against Conchubor?” (p.287.) と、王への反抗を求めるが、これは、彼女の目前にある「現実」が彼女にとって肉体的な死以上の意味をもつ精神的な死となるからである。ところが、Lavarcham にあっては、“In the end of all there is none can go against Conchubor, and it's folly that we're talking, for if any went against Conchubor it's sorrows he'd earn and the shortening of his day of life.” (p.288.) と、王への反抗は肉体的な死を意味するに留まり、肉体的な死はすべての終結を意味している。この点で、Lavarcham の現実認識は Conchubor と同じ系列の下にあると言えよう。Deirdre は「肉体の死」より「精神の死」を重視し、後者を避けるために Naisi との愛に自らの夢を託すことになる。自然を愛し「若さ」を表わす Naisi との愛は、物質的富を好み「老」を示す Conchubor との結婚が「醜」(ugliness) であるのに対し、「美」として認められる。この「美」に生きようとする——即ち——精神的死を脱しようとする Deirdre の行動は、“Naisi! Do not leave me, Naisi. I am Deirdre of the Sorrows.” (p.295.) と、積極的な訴えとなって現われている。Naisi との愛に生きることは、彼女にとって、喜びの持続・夢の実現であり、これがそのまま生の充実につながっている。しかも、彼女にこのような行動を取らせる因を成しているのは——“It should be a sweet thing to have what

is best and richest, if it's for a short space only." (p. 297.)——移ろい行く現実への認識であり、この彼女の現実の認識の仕方は、引き続き Naisi の台詞——“ . . . we've a short space only to be triumphant and brave.” (p. 297.)——にも示されているように、Naisi の現実の認識の仕方と全く同じものである。

第二幕は、七年後、Deirdre と Usna の三兄弟が逃れている Alban の島へ Fergus が Conchubor の和解の命を受けて彼等を迎えに来るところから始まるが、彼女は、“Emain should be no safe place for myself and Naisi.” (p. 303.) と、Emain が自分達にとって安全な場所でないことを十分に承知している。しかも一方、彼女の心には人生に対する不安の念がきざしている——“ . . . wondering all times is it a game worth playing, living on until you're dried and old, and our joy is gone for ever.” (p. 305.). それは「老」の迫り来るのと「喜び」の移ろい行くことへの不安であり、この彼女の不安に拍車をかけるのが Conchubor の 'spy' である Owen の台詞である——

“ . . . I tell you, you'll have great sport one day seeing Naisi getting a harshness in his two sheep's eyes and he looking on yourself. Would you credit it, my father used to be in the broom and heather kissing Lavarcham, with a little bird chirping out above their heads, and now she'd scare a raven from a carcass on a hill. (*With a sad cry that brings dignity into his voice.*) Queens get old, Deirdre, with their white and long arms going from them, and their backs hooping. I tell you it's a poor thing to see a queen's nose reaching down to scrape her chin. . . . (*Muffles himself in his cloak; with a sort of warning in his voice.*) I'll give you a riddle, Deirdre: Why isn't my father as ugly and old as Conchubor? You've no answer? . . . It's because Naisi killed him.” (pp. 308-9.)

この言葉によって、彼女は、自らの「喜び」である「若さ」が移ろい行くことへの不安感を益々掻き立てられ、自分の老いたる姿を乳母 Lavarcham の中に見るような気がする。其処へ到着した王の使者 Fergus は、Naisi に向って、“ . . . there's no place but Ireland where the Gael can have peace always.”

(p.310) と、更に Deirdre には、 “It’s little joy wandering till age is on you and your youth is gone away, so you’d best come this night, for you’d have great pleasure putting out your foot and saying, “I am in Ireland, surely.” (p.310.) と、Celt 民族の性情、即ち、理窟抜きで ‘beautiful Queen’ たる国土への慕情に訴えかけるが、それも二人の心を決定的に動かすまでには到らないところが、Naisi が Fergus に漏らした不安の念 — “There have been days a while past when I’ve been throwing a line for salmon or watching for the run of hares, that I’ve a dread upon me a day’d come I’d weary of her voice, (*very slowly*) and Deirdre’d see I’d wearied.” (p.312.) — この言葉を陰で聞くに及んで、彼女は、自らの不安が単なる不安でなく、現実化せんとしていることを悟り、第一幕においては現実に逆って其処から Naisi と共に逃れた Conchubor の支配する Emain へ戻ることに決める。永遠に保てない「喜び」に、即ち、「夢」にすがりついて幻滅感を味わうことを潔しとしない彼女の気持がその後は強調されて言葉となっている。例えば、 “The dawn and evening are a little while, the winter and the summer pass quickly, and what way would you and I, Naisi, have joy for ever?” (p.314.) . 此処には、彼女と Naisi の「喜び」を一層強からしめた自然も移ろい行く「喜び」のはかなさを強調するために現われている。確かに、「若さ」そして「若さ」に通ずる「美」が「喜び」となっている彼女にとって、「喜び」が永遠に保てないという考え方は思考方法としては何の破綻を示すものでもない。Naisi が彼女の気持を引き立たせようとして、 “. . . it’s right to be away from all people when two lovers have their love only. Come away and we’ll be safe always.” (p.315.) と、このように外的事情の安全さを説く時も、今や「愛」そのものが移ろい行くものとして彼女の不安感の原因であってみれば、 “There’s no safe place, Naisi, on the ridge of the world. . . .” (p.315.) と、非常に悲観的な見解となって現われるが、これは彼女の現実認識のなせる業であってみれば、そのまま「美」と「喜び」に対する宿命観的な認識へと通じざるを得ない。如何ようにしても永遠に喜びを保つことができないのなら、喜びの最中にそれを中断する

ことによって保つ外ないといった風な考え方が次の台詞からうかがうことができる——“... isn't it a better thing to be following on to a near death, than to be bending the head down, and dragging with the feet, and seeing one day a blight showing upon love where it is sweet and tender?” (p.315.)

一度得た「喜び」の消え去った後での惨な状態は、過去の「喜び」があるだけに、彼女には想像するだけでも堪えられないものである——“It may be I will not have Naisi growing an old man in Alban with an old woman at his side, and young girls pointing out and saying, “that is Deirdre and Naisi had great beauty in their youth.” (p.320.). 此处で「老」は厭うべきもの・忍び難いものとして「若さ」における「美」とはっきり対立させられている。更に、「喜び」のない人生は生きるに価しないものであり、そのために彼女はあえて死を避けようとはしないが、それは「若さ」「愛」「美」が移ろい行くことに直面するのを望まないがためであって、決して死を美化しているからではない——“It's seven years we've had a life was joy only, and this day we're going west, this day we're facing death, maybe, and death should be a poor, untidy thing, though it's a queen that dies.” (p.321.)

次に、第三幕においては、Deirdre と Naisi は Emain へ戻るが、此処で彼等を待っているのは Conchubor によって仕組まれた死である。彼女は、仮の宿舎としてあてがわれた 'tent' の外の、掘られたばかりの墓穴を指して、“... it's that grave when it's closed will make us one for ever, ...” (p.331.) と、愛する二人が合一することによって自らの喜びを全うできると考えるが、これは死に対する彼女の考え方に変化が来たしたためではなく、相対的に、生きて面する現実よりも死の現実には彼女の心が志向しているからである。このことは、「老」「愛の移ろい」「美の衰え」という現実の否定的な面への認識が、彼女に現実の生活そのものを避けさせている反面、究極の現実である死は、現実的には醜悪なものとして認識されながらも、他方、観念として肯定されているということである。従って、死も彼女の「喜び」の対象である Naisi と共にあってこそ彼女にとって意味のあるものとなるのであって、彼が王の企みに

落ちた弟達を助けるため彼女を振り払って出掛けようとする時、自らの夢にすがろうとする彼女の叫びは、第一幕の場合と同様、“Do not leave me, Naisi. Do not leave me broken and alone.” (p. 333.) と、必死の訴えとなって現われる。だから、Naisi が彼等の直ぐ後を追って死ぬに及んでは、この世は彼女にとって、“To what place would I go away from Naisi? What are the woods without Naisi or the sea shore?” (p. 339.) と、既に何の意味ももたなくなる。一方、Conchubor は生活の充実には物質的富のみでは不足することを実感するようになり、今は自らの「悲しみ」即ち「老の淋しさ」を補足する対象として Deirdre を求めるようになるが、その求め方は、第一幕同様、物質的富に訴えるやり方で、此処に到るも猶 Deirdre の世界には入ることのできない存在であることを示している——

“There’s one sorrow has no end surely—that’s being old and lonesome. (*With extraordinary pleading.*) But you and I will have a little peace in Emain, with harps playing, and old men telling stories at the fall of the night. I’ve let build rooms for our two selves, Deirdre, with red gold upon the walls and ceilings that are set with bronze. There was never a queen in the east had a house the like of your house, that’s waiting for yourself in Emain.” (p. 337.)

かく彼の誇る華麗さも、王の背信を怒った Fergus によって王宮が焼かれるに及び、物質的富の空しさとして *ironical* に示されることになり、同時に、生存せる王は、“. . . an old man and a fool only” (p. 342.) という Deirdre の揶揄でもって、同じく彼女の称する “. . . young for ever” (p. 342.) なる死せる Naisi と対照されている。そして自らも “. . . young for ever” (p. 343.) なる存在になることを確信して、“I have put away sorrow like a shoe that is worn out and muddy, . . .” (p. 344.) と、現実の悲しみを乗り越え、次のように、“. . . in the grave we’re safe, surely. . . .” (p. 344.) と、死によって「喜び」の定着を望み、遂には、“It’s a pitiful thing, Conchubor, you have done this night in Emain; yet a thing will be a joy and triumph to the ends of life and time, ” (p. 345.) と、究極の現実である死を越えての「喜び」



の永遠性を讚美してわが命を断つに到る。老いて生き残った Conchubor は、Lavarcham の “I have a little hut where you can rest, Conchubor; . . .” (p.345.) との言葉に対して, “Take me with you, I’m hard set to see the way before me.” (p.346.) と、Deirdre の最も怖れた老いさらばえた姿で、喜びもなく、ただ肉体的に留まっているだけの存在にすぎないことが予測され、すべての点で Conchubor の完全な敗北が見て取れる。

Deirdre の求めるものは「若さ」と「愛」と「美」であり、此処に彼女は「喜び」を見い出しているのであるが、この「喜び」は作者の直観によって絶対的なものとされている。そして Conchubor によって示される「老」は、既に触れたように「愛」とは無縁な「醜」として前者の対立要素となっているが、前者が絶対的なものであるだけに、後者を是が非でも避けなければならないわけである。この後者と結びつけられているのが物質的富であり、前者は自然の素朴さとつながっている。そしてこの物質的富は人間性の墮落を伴い、引いては現実の認識を不十分な、或は、不可能なものにさせる一方、自然の素朴さ、或は、原始性は現実を真に認識させるものとして表わされている。現実の認識とは言っても、これは、現実の変移——即ち——現実のものは移ろい行き、その究極は死であるという認識である。この認識があつて Syngé の美意識は完全となるわけであるが、最後に、これまで考察してきた Deirdre と Conchubor の現実認識の差異を括めてこの小論の締め括りとする。

Deirdre にあつては、「老」或は「死」は、移ろい行く現実の醜い結果として決定的な打撃となっており、それは彼女の甘受することのできない現実の否定面であり、彼女の行動がすべてこれを避けることに向けられているということは、彼女の現実認識は現実の否定的な認識であるということになる。この否定的な現実と対立するものが、彼女の「喜び」に通ずる「若さ」「愛」「美」である。これらも現実のものとしては移ろい行くものであり、その移ろい行くことが彼女の不安を起す因として認められるが、その概念それ自体が現実に対する夢として彼女の希望となっている。現実の否定的な認識は、当然、彼女の現実における悲劇の原因となり、そのためそれを悲劇美として謳いあげるには「若さ」「愛」「美」という一般的な概念によらねばならない。この一般的な概念への希求を、従来、人間の

普遍性として評する傾向にあるが、或る意味ではそのように評することができるとしても、それはあくまでも現実否定からでてくる態度であることを知らねばならない。Conchubor においては、「老」と「死」は、Deirdre のように全面的な否定の対象とはなっていない。それは現実の認識が Deirdre の否定的な認識とは異なっているからである。彼の場合は現実の認識は寧ろ肯定的であり、「老」や「迫りくる死」からくるものは「淋しさ」ではあってもその中で生きるに値しないものではないのである。そしてその「淋しさ」を癒すものは物質的富と「若さ」からくる「美」とであるが、彼の求める「美」は素朴な自然に養われた、即ち、原始性を有する「美」ではなく、彼にとって「安定」と「華麗さ」を意味する物質的富に適合する「美」である。従って、Alan Price が、William Blake の詩を引用して、Conchubor を 'to bind himself a joy' と評しているように (Alan Price: *Synge and Anglo-Irish Drama*, Methuen & Co Ltd, 1961, p.193.), 現実の変移は彼によって真に認識されているとは決して言えない。彼の悲劇が存在するのは正にこの点である。

現実的な悲劇を乗り越え永遠の喜びに生きる Deirdre の悲劇美というものに対して、Conchubor の場合は、あくまでも現実的な悲劇の域に留まっている。これは、Deirdre の悲劇が現実否定の上に成り立っているところから、現実を超越した喜びの世界に生きることができたのに対し、彼の悲劇は現実肯定の上に在るところに、現実的な悲劇の域を脱し得ない理由がある。そして Conchubor の場合、Deirdre の「悲劇美」に対して、言うなれば、「悲劇醜」とも見做されているところに Synge の現実認識と美意識との関係が読みとれるわけである。

付記。本稿は日本英文学会第16回中国四国支部大会(於 広島女学院大学, 昭和38年11月10日)における研究発表を修整したものである。但し、発表の際には一部日本語訳で述べたり省略した引用文等も本稿ではすべて原文のまま引用したことを付記しておく。